

まさかの結末！ 中野次郎久々のG I 制覇は幻に



宮島

4/3~8

G I

宮島チャンピオンカップ

中野次郎



山口剛



優勝戦12R出走表

艇番	選手名	年齢	支部	今回成績
①	中野 次郎	43	東京	1131221
②	上條 暢嵩	31	大阪	3116351
③	湯川 浩司	45	大阪	5313231
④	山口 剛	42	広島	541312
⑤	井上 忠政	29	大阪	1432162
⑥	笠原 亮	45	静岡	1526222

初日DRを先勝は峰竜太。このまま順当にシリーズをけん引かと思われたが、2日目10Rで不良航法を取られ予選は15位。一方、2日目DRを制した桐生順平も思うようにポイント伸ばせず予選13位と主力陣が苦戦。これによりV戦線は大乱戦に突入。この流れの中で安定感がキラリと光ったのが中野次郎。予選は6戦3勝で唯一のオール3連対キープで首位通過。好枠イン勢が相次いで敗れた準優勝戦も、12Rの中野だけはコンマ03のトップSから逃げ切り優勝戦1号艇を獲得し、久々のG I Vに王手をかけた。ただ大会最終日は強風のため11R以降は中止打ち切りとなり中野にとっては幻のVとなってしまった。強力な伸びを生かすために集中力を切らさず好Sを連発で踏み込んでいただけに惜しまれる結末だった。

春の宮島は風向きが一定しないのは毎年恒例。これにより各選手の口からは「Sが難しい」のコメントが多く聞かれたが、例年以上に感じたのは風向きと決まり手の相互関係。一般的に追い風は内水域が有利で向かい風はダッシュ向きと言われているが、この大会ほど当てはまらなかったことは過去に例がないほど。初日は1Rから向かい風が吹き4Rまで3号艇3コースが開幕4連勝。追い風に変った5R以降は横風に変わった8R以外は全てイン逃げ決着。これ以降の日も予選は同じような結果が続いた。潮の干満差が小さい大会だっただけに、風の影響がいつも以上に浮き彫りになったのかもしれない。どちらにしても「春の宮島は風を見る」が備忘録となりそうだ。(BR宮島専属記者・宮崎経賢)

シリーズ展開

現場記者の目

菅章哉が涙のG I 初優勝 お祭り騒ぎのウイニングラン 表彰式はずぶ濡れで



津

4/4~9

G I

ツッキー王座決定戦



着	人気	艇番	選手名	年齢	支部	今回成績	進入	ST
1	◎	①	菅 章哉	36	徳島	1122141	1	10
2		⑤	柳生 泰二	40	山口	4323332	5	11
3	△	③	土屋 智則	40	群馬	1614441	3	07
4		⑥	長田 頼宗	39	東京	2262252	6	18
5	○	②	茅原 悠紀	37	岡山	3212311	2	08
6	×	④	中島 孝平	45	福井	1163522	4	12
2連単		①-⑤	1390円	5番人気	逃げ			
3連単		①-⑤-③	7570円	22番人気				

Wドリーム初日は、土屋智則が井口佳典のインを差し切る快演。そして2日目は茅原悠紀がトップスタートから押し切った。だが、このふたりよりも注目を集めていたのは菅章哉とエース機の井上一輝。井上は予選終盤3連勝として3位通過。菅は茅原と激烈なトップ争いを、同率ながら1勝差で上回り自身初のG I予選トップ。準優勝は明暗を分けた。井上は佐藤隆太郎のダッシュに飲み込まれ、土屋が差し切り3連単は24万7330円という記念レース歴代2位の高配当が生まれた。一方の菅は、緊張に打ち勝ち見事逃走。優勝戦も1号艇からインを主張し、コンマ10のスタートを決め、涙のG I初優勝を飾った。菅と人気を分け合った茅原は5着に敗れ、2着に柳生泰二・3着には土屋が入線する波乱の決着に。

予選途中で、落雷により宿舎停電というアクシデントに見舞われた今節。無事開催が続けられたが危うく菅は幻の優勝になるところだった。それもこれも、終わってみればすべて菅のための演出だったと言える。涙、涙の初優勝。ウイニングランは本人以外のメンバーまで乗り込むお祭り騒ぎ、そしてずぶ濡れのまま向かった表彰式と、良い意味での前代未聞。それが許される人柄が彼にはあった。残念だったのは地元勢の不振。新田雄史だけは準優勝へ駒を進めたが井口佳典や豊田健士郎らは予選で力尽きた。新田にしてもオーシャンカップの出場権へ優出条件だったが、次走の福岡G Iで辛うじて手中。10月の津ダービー出場権は厳しい道のりが待っているようだ。(中日スポーツ 高橋亮考)

シリーズ展開

現場記者の目

積み重ねた努力が実を結び
上條暢嵩が地元GI初制覇でうれし泣き



住之江

4/12~17

GI

太閤賞



着	人気	艇番	選手名	年齢	支部	今回成績	進入	ST
1	○	②	上條 暢嵩	31	大阪	3112411	2	12
2	◎	①	桐生 順平	38	埼玉	2313121	1	13
3	△	④	池田 浩二	47	愛知	4311242	4	08
4		⑤	大池 佑来	38	東京	431312	5	11
5	×	③	山崎 郡	35	大阪	1252211	3	12
6		⑥	中村 晃朋	33	香川	221542	6	16
2連単 ②-①			1240円	5番人気	差し			
3連単 ②-①-④			3620円	11番人気				

初日DR千成賞は石野貴之、2日目DR関白賞は桐生順平がともに人気にのせて逃げ切った。予選道中は初日と4日目は絶好のコンディションだったが、2日目と3日目は雨が降ったり止んだりする不安定なコンディション。選手たちも調整に苦戦するシーンが印象的だった。それが影響したのか、Wドリーム戦を制した両者も正反對の結果に。桐生は予選をトップで通過して優勝戦の1枠をゲット。しかし、石野は予選を12位で通過したが準優で敗退となった。石野は地元ファンの期待に応えることができなかったが、それに奮起したのが大阪支部の後輩である上條暢嵩と山崎郡だ。上條は2枠、山崎は3枠で優出を決めた。優勝戦は上條が鋭角差しで地元GI初制覇を達成。層の厚い大阪支部の底力を見せつける形となった。

上條暢嵩が地元GIで初優勝。今節は新エンジンに変更されて3節目。整備に制限がある中で、ペラ調整のみで見事にエンジンのパワーを引き出してきた。以前までの印象はターン力でどうにかするイメージだったが、最近は調整力も飛躍的に上昇。「地元の記念で勝ちたいと思って頑張ったことが、実を結んで良かったです」と話すように、積み重ねた努力が見事に結果につながった。

レース直後の勝利者インタビュ―では涙を見せたが、今節は地元二枚看板の石野貴之、松井繁が不在の優勝戦。それだけに期するモノがあったのだろう。プレッシャーから解放されて、様々な思いがこみ上げてのうれし涙。年末のグランプリでも歓喜の涙を流してほしいものだ。
(安達弘持)

シリーズ展開

現場記者の目

息子に威厳を示した！
石渡鉄兵が6度目のGI優勝を決める



福岡

4/13~18

GI

福岡チャンピオンカップ



着	人気	艇番	選手名	年齢	支部	今回成績	進入	ST
1	◎	①	石渡 鉄兵	50	東京	213121	1	09
2	○	③	茅原 悠紀	37	岡山	331転221	3	14
3	×	④	宮地 元輝	38	佐賀	4314212	4	16
4		⑥	新田 雄史	40	三重	1133362	6	21
5		⑤	中島 孝平	45	福井	413142	5	21
転	△	②	篠崎 元志	39	福岡	5221321	2	17
2連単 ①-③			400円	1番人気	抜き			
3連単 ①-③-④			980円	1番人気				

序盤は不安定な天候に伴う荒れ水面が選手を苦しめた。初日、3日目は安定板がつく水面状況。毒島誠、馬場貴也といった優勝候補も予選敗退に終わった。そんな中、ウネリを乗りこなした石渡鉄兵が堂々の予選トップ通過。「江戸川みたいでしたからね。逆に見せ場ぐらいに思っていた」。背にする63号機は序盤から絶好調。とはいえ、いくら仕上がり良くても簡単に逃げられないのが当地水面。優勝戦は地元周年Vに意欲を燃やす篠崎元志が2コースから石渡に迫る展開。それでも最後はパワーに勝る石渡が1周2Mで逆転の差しを決めて、当地周年初制覇。通算6回目のGI制覇でポートルレーヌ界屈指の波乗り巧者がまた新たな勲章を手にした。

石渡鉄兵が昨年9月蒲郡周年に続く6度目のGI奪取。昨年12月に節目の50歳を迎えたが、まだまだ記念クラスが相手でも水面、エンジン次第では力が通用することを証明した。「こんなすごいメンバーが相手でも自分にまだ勝ち切る力はあるんだなど。でも、信じられないですね」。今節手にした63号機に力があったのはもちろんだが、力を維持できるには理由がある。その一つは息子で131期生・翔一郎の存在。「まだまだ壁でありたいと思っている。背中を見せていきたいなど。これ（GI優勝）で、しばらくは言うことを聞いてくれますかね」とはにかなだ。支部としては若松クラシックを制した佐藤隆太郎に続く吉報。今年の東京勢はいい風が吹いている。
(スポニチ・鳥飼)

シリーズ展開

現場記者の目